

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心豊かにいっぱい遊ぶ子	「やりたい」が つながる、広がる	子どもたちはもっとやりたい! こうしたらどうなる? と思える遊びに出会い、意欲的に遊びを楽しんでいる	・遊びたい、あそぶのが好き! と感じている姿が多くみられる ・子供たちの「やりたい」という思いを保育者に受け止めてもらうことで、意欲的に取り組む姿に繋がっていると思う ・好奇心があり、「やりたい」という思いはあるが、「こうしたらどうなる?」まで考えようとする姿は少ない	B	A	・可能な範囲で環境を整え、設定することで、子ども達の意欲(可能性)の芽を引き出す種まきをしている。そこに、先生が寄り添いながら一緒に考え、一緒に楽しんでいる姿が伝わってくる。	・子どもたちが「やってみたい」「こうしてみたい」という思いは出しているが、「こうしたらどうなる?」という探求心に繋がっていくためには、保育者の言葉かけや、環境の再構成が必要
		子どもたちは様々な体験の中で考え、試し、工夫して遊んでいる	・松ぼっくりやどんぐり、実つた柿や草花など身近な素材を自分で選び、遊ぶ姿が見られる ・園庭で稲を育てることで、『米作り』を経験できるだけでなく、田んぼに来た虫たちに触れる機会から、異年齢の関わりにも繋がっていった	A	A	・体験を通して学んでいく、活動の中に学びがあり、思考があり、工夫が生まれる。活動を通して、保育者や友達と繋がる。家族とも繋がる。繋がることで、伝える力、聞く力が育ち、互いを認め合うことができる。	・「明日も遊びたい」「今日はこれをやろう」という思いにつなげる為の手立ての工夫が必要
		子どもたちは自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたり、注目したりしながら、みんないっしょにありのままの姿で育ちあうことを喜んでいる	・ありのままの思いを保育者に受け止めてもらうことで、自分の思いを伝えようとする姿が沢山見られる ・遊びや生活の中で友達と認め合う場面が見られる ・相手の思いを聞く為に、保育者の仲介が必要になることが多い	B	A		・相手の話を聞くことが楽しいと思えるよう保育者が思いを引き出すような言葉かけを行ったり、話を聞く必要性をくり返し伝えていくなど、環境の工夫を続けていく

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どものつづきやき、視線等の意味を探り、一人一人の思いに共感・肯定し、自己肯定感を高める声かけをする	・1人ひとりを受け止め、愛情をもって接している。又、園内研修では、写真を通して子どもの思いを読み取る研修を行ってきたことで、実践に繋がっている ・子供達と遊んだり話している中で、共感したり提案したりしながら、言葉かけを考え接している	A	A	・とりわけ幼児期は発達段階に個人差が大きい。1人ひとりの育ちと適切な支援を確認し合っており取り組んでいると感じます	・引き続き子どもの思いを捉えていく為の研修を行ったり、その子にとってどんな言葉かけが「認めてもらえた」に繋がっていくかを意識していく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	安心できるこども園を目指し、子どもたちの生活リズムの多様性に配慮し、早番から遅番まで安心して過ごせるよう適宜、見直し改善を行う	・早番、遅番、支援児、0歳児も皆が安心して過ごせるよう話し合いがされ、室内環境の改善に努めてきた ・1人ひとりの生活リズムに配慮しながら、1日を見通しその子に合った対応をしている(午睡のタイミング、遅番の部屋の移動の時間等) ・毎日の打ち合わせ等で、引継ぎを行い円滑に対応できるようにしている	A	A	・小さな怪我や、ヒヤリも共有し合う雰囲気。原因や予防については、子どもの発達、遊びの様子環境等多面的な視点から検討することが大事でしょう(ハインリッヒの法則)	・早遅番の分掌を作ることで、環境も見直しを適宜に行っていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの発見、疑問、喜びの出会いを捉え、もっとやりたい! こうしたくなる?と試したり繰り返せる環境作りをしている	・子供が発見し「やりたい」と遊び出せる環境が出来ていたと思う ・自然を活用したり、散歩で様々な物の発見を共有したりしながら、楽しめるようにしてき ・こうしたらどうなる?と試したり繰り返す姿に繋がって環境設定や関わり方に難しさを感じた	B	A	・子どもの特性と支援内容の共有は大事。特定の支援児だけでなく、全ての子どもたちがそれぞれに支援を受けながら、育っていくと捉えたいと思います	・繰り返ししたり、継続していける環境を意識していく為に、計画性をもち学年間の連携を行っていきたい ・“もっと”を引き出す為に繰り返し遊ぶことにも視点を向け、環境を作ったり関わりをもつようにする
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	継続的な体調管理と感染予防を行う。日々の小さな怪我とヒヤリとした場面を打ち合わせで報告し、原因と改善を職員間で共有する	・ヒヤリハットや打ち合わせや職員会議で日々共有している。ヒヤリハットの提出率が上がっている ・減災教育を受けたことで、新しい視点で避難の仕方や身の守り方を考える事を続けている	B	B		・防災の観点では、減災教育を受けたことで、避難訓練の方法を見直し、実践に繋げていけるようにする
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	基本的な生活習慣が身に付くよう、家庭と連携し、個々に応じた経験の積み重ねを行う	・送迎の際、排泄や食事など生活習慣を家庭と園の様子を伝え合い、共有しながら支えていけるようにしている ・手洗い、うがいなど基本的な生活習慣を身につけていけるよう、必要性を伝えきたことで、自分から行おうとする姿に繋がってきている	B	A	・複雑な勤務体制や手狭な環境下での運営や研修への取り組みについて、評価しています	・ハンカチやティッシュの持参を意識していけるような掲示や発信を行っていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	月1回支援児会議を行い、計画的に支援児活動を進める。また、個々の発達、特性を職員間で共有し支援に活かす	・アンパンマンの会の参観、支援児紹介ファイル等担当クラスだけでなく、全園の職員で共有することができた。支援児以外の気になる子も、ケース会議を行い、職員が同じ対応ができるようにしている ・支援児担当の職員以外もアンパンマンの会を参観することができたことで、支援児の特性や支援の方法を学ぶことができた	A	A	・家庭への支援にいつも様々な工夫をされていると感じます。基本的な生活習慣の確立など家庭におけるより良い取り組みに繋がっていくと良いと思います	・より丁寧な支援をする為にも、支援児の特性を共有できるよう、支援会議に担当者以外の職員も参加していけるようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	職務分掌を中心に、計画的に見通しをもって企画・発信を行う。職員同士の語り合いを大切にしながら、園運営を進める	・年間に沿って計画的に進めていくことができています ・幼児クラスの行事(運動会や発表会など)乳児クラスの職員も役割をもって関わっていったことで、園全体で行事を進めていく事ができた ・1年を見通した保育計画をたてる難しさを感じた	B	A	・職員の自己肯定感も大事。先生たちはもっと自己肯定感を持って良いと思います	・子どもたちにどんな経験をして欲しいのかをもう一度見直しながら、来年度の年間計画を立てていく ・保育者の語り合いを大切にしていけるよう、時間や場所づくりを続けていく
6 研修	(1)研修体制の充実	子どもの学びや育ちを多面的に捉え、10の姿で分析をする。職員も子どもたちともっとやりたい! こうしたらどうなる?を一緒に楽しむ	・今年度出来る限り全ての職員が参加できるような公開保育や研修体制にしたことで、皆で学ぶ体制が出来ていた ・付箋を無くし、語り合うことで10の姿に当てはめながら子どもたちの姿を発見に意見し合い、深く話し合うことができた ・職員も子どもも、「こうしたらどうなる?」を楽しむまでの余裕の無さがあつた	B	A	・職員が健康第一で頑張りすぎずに頑張ることによって「やりたい」自主性、主体性を高めていきたいと思います。園の続きを小学校で続けているという意識を持つようにします	・定期的に園庭環境や遊びを学年間で共有する機会を作っていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	安全に遊べる乳児園庭作り。幼児は自ら遊具、玩具、用具を選び、繰り返し試したり工夫したりできる環境を作る	・乳児園庭も自分で玩具を選んだり自然物に触れたいできるよう工夫して環境を設定した ・自分で里山から自然物を選び遊びに取り入れ、繰り返し遊ぶ姿がある ・発達に合わせ環境を考え遊具、玩具の配置ができるよう、会議で話し合いったり、定期的に変わっていくようにしている	B	A	・時代の変化で対応も変わっている。多様な「誰一人取り残さない」検討を続ける。	・園児が体を動かして思いきり遊べるよう、時差で使うなど園庭の活用の仕方を工夫していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	懇談会・参加会等を実施し、園の教育・保育を知ってもらう。遊びを可視化して家庭へ発信し、子どもが遊びの様子を保護者に伝え、遊びの続きを家庭と共有するようになる姿が見られる	・参加会や写真ボードの掲示などに、様子を載せるだけでなく、10の姿に当てはめてみたり、どんな成長の姿があったかなど保護者が見て分りやすいよう、書き方を工夫して伝えている ・日々のボードや連絡帳、ドキュメンテーションを活用しながら、送迎時の保護者と子どもの会話や園との共有に繋がっている	A	A	・避難訓練通りには、進まないことが想定できる。一人一人の職員が動けるか、様々な状況での訓練やロールプレイを大切にしていきたいと思います	・気になる子が多い中、参加会の人数や時間帯を見直したり、個別面談と懇談会を時期をみて実施していくことも検討していきたい
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	10の姿を通して子どもの学びを発信する。先の見通しをもった指導計画を立て、交流できる機会を作る	・10の姿に当てはめて考えていく事で、職員の意識向上に繋がっていると思う ・小学校がすぐ近くでない為、連携の難しさを感じる	B	A		・小学校に連絡を取り、授業を見に行ったり、公開保育への参加をお願いしたりしながら、交流の機会を作っていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	近隣園との交流や地域の様々な人との交流、情報交換を行う。地域にある公園、広場を園活動に活かす	・近隣園の職員が自園の公開保育に参加する機会があり、交流する機会となった ・近隣の商業施設に協力をお願いして、買い物に行かせてもらったり、勤労感謝の訪問を通し交流する機会をつくっていった	B	B		・地域の特色を活かした保育にしていけるよう、地域に何があるのかを再確認し、子どもたちの遊びに取り入れながら地域との交流に繋がっていくよう、保育計画を立てていく